

授業システム

2024.2.20

一言で授業と言っても、その進め方、やり方はいくらでもある。決まっているわけではない。授業台本、シナリオ、手引書があるわけではない、だからといって、大きく違っているわけでもない。とりあえず、こんな授業がよいでしょうというパターンのようなものはある。

恐ろしいのは、授業が授業者である教員に完全に任せられている点である。授業は、教員次第ということになる。授業は、1日に6校時までである。かなり長い。これが毎日のように続く。もし、授業が生徒にとって辛いものであったとしたら、それはすなわち学校生活を左右することになる。

果たして、授業はいい方向に進んでいるのだろうか。授業は改善され、生徒にとって魅力的なものとなっているのだろうか。どうも疑わしい。生徒は、健気である。一生懸命やろうとする。授業の責任者である教員は、そんな生徒の姿に甘えてはいけけない。

教員になって1年目だった。自分としては、大した授業ができていないと自覚していた。ところが、子どもたちの反応がよく、一生懸命勉強してくれる。すべては、前の学年の先生方のおかげである。その貯金で授業をしていたというだけのことである。

貯金は、あっという間になくなっていった。増えるには時間を要するが、減るときは早いものである。2学期からは、子どもたちの表情が曇り、生き生きとはしなくなっていった。授業者として苦しかった。申し訳なかった。子どもたちは、もっと苦しかったことだろう。辛かったことだろう。あの頃の私には、とにかく子どもたちと遊ぶことしかできなかった。とことん遊ぶことが、私にできる唯一のことだった。

2年目となり、心を入れ替えた。このままではいかん。ようやく、教師になろうと本気になった。今までは、身分上、教師だというだけだった。片っ端から本を読んだ。食欲に勉強をした。何とかしなければならない。その思いだけだった。授業が改善したかどうかはわからなかった。少なくとも子どもたちの表情はよくなったような気がした。たぶん、私の一生懸命さ、熱意だけは伝わったのかもしれない。

教員が行う授業の平均値を上げるような授業システムはないものだろうか。スーパーティーチャーのようなすばらしい授業をする教員がいてもよい。だが、大切なことは、授業の平均値を上げることではなからうか。こういう進め方で、このようなやり方をすれば、子どもたちにとって魅力的な授業になりますよ。だから、みんなでやってみませんか。授業システムとはそういうことである。

野田中学校に勤務して3年が経過しようとしている。ようやく授業システムができてきた。50分間、ずっと生徒が授業に参加し、自分で考え、書き、話すような授業である。授業システムは一人の力によりできるものではない。みんなで作るものである。重要なことは、特別なシステムではなく、誰にでもできそうなシステムにすることである。誰にでもできるからこそ、平均値が上がるのである。若かりし頃の大失敗から、ようやく授業のことがわかってきたような気がする。